

保育における抱く行為

The Hug Actions in Early Childhood Care And Education

足立 日佐子

Hisako ADACHI

I はじめに

『抱く行為』という場合、一般的に母親に抱かれている乳児の姿を想像することが多いであろう。「抱く」という行為は、子どもから大人まで、親子・恋人同士など対象や形態・状況もさまざまであり、また意識や意味も異なる。乳幼児の健全な成長の過程において、母子関係が重要な要因であることはいうまでもない。子どもにとっての安全基地となる母との関係で「抱く」行為はとても重要な意味のあるかかわりといえる。子どもはその抱っこを通じ、自己の存在を知り他者を受け入れ、そして人を信頼し絆を深める大切な基礎を学んでいく。

研究を始める前、私は埼玉県にある私立幼稚園で保育者として勤務をしていた。その日々の保育の中で、保育者と子どもの、会話やケンカの仲裁・遊び・活動の手助けなど、いろいろなかかわりを目にしてきた。そして、それぞれの場面で、援助の範囲も異なり、保育者の意識の違いを感じさせられたが、その中でも年長児を抱く保育者の姿を見る度に「どうして抱いているのだろうか」「この年齢にこの行為が必要なのか」「周囲の子どもの様子が目に入っているのか」と考えさせられることがしばしばあった。私自身の中に“保育は不平等があってはならない”“子どもとは平等に接したい”と望む自分の保育意識があり、それが集団の保育の中における「抱く」という行為を不自然に思わせ、年長児を抱く保育者のかかわり方に疑問をいだかせるきっかけになった。もう一度、保育について二年間学び直す間に「自分の思っていた抱く

行為の解釈はどうだったのか」この行為の意味を問い直すことが必要だと気付いた。卒業後、再び子どもとかわる中で、集団保育の場における幼児期の子どもと保育者の「抱く」行為を整理し、更に自分の「抱く」行為に対する意識の見直しをしたと思ったのがこの研究にとりかかった動機である。

II 研究目的

抱くことは乳児期からの重要な行為だが、このことが集団保育において、特に年長児（5,6歳）の子どもと保育者自身とのかかわりに、どのように現われているのか整理していくことを目的とする。

III 研究方法

1. 文献研究により「抱く」ことの意味を明らかにすること。

2. 参加・ビデオ観察から保育現場における「抱く」行為の実際について検討すること。

方法：2,3歳児は参加観察し、5,6歳児は登園から降園まで室内・戸外での保育者とのかかわりをビデオ観察する。

対象：①参加観察 - A園 - 平成9年4月～12月迄

園児9名

[3歳2名=各女児/2歳7名=男児2名・女児=5名]

週2回

[毎週火・木曜日、9月のみ金曜日を含め週3回]

午前10時～午後13時

②ビデオ観察

- B園 - 平成10年4月～12月迄

園児32名 年長1クラス [男児13名・女児19名]

月2回〔水曜日或は土曜日〕午前9時～11時30分
 -C園-平成10年5月～12月迄
 園児38名 年長2クラス〔赤組=男児11名・女児8名〕
 〔白組=男児12名・女児7名〕
 月2回〔水曜日のみ〕午前9時～11時30分

3. 保育者の「抱く」行為に対する意識を調査すること。

方法：保育者と一対一、または保育者数人に対し面接調査により行う。【保育者への質問内容】に基づき、保育者の「抱く」行為に対する意識をカセットレコーダーにおさめ、後で言葉を起こし質問内容と照らし合わせる。
 対象：平成10年10月～12月迄
 現在年長児担任 或は以前年長児の担任経験のある現役保育者16名、保育終了後又別日 各園内・他
 約30分から1時間程度

IV 研究結果・考察

1. 文献を通しての「抱く」ことの意味

「抱く」という言葉の意味の中から“手で胸にかかえる”“腕の中にかかえこむ”ことが本研究での「抱く」行為の姿に該当する意味であると考えられる。また、通常の「抱く」と同様に使われている「抱っこ」（幼児語）について見ると“抱くこと また 抱かれること”となっており、“抱くこと”“抱かれること”とは能動的な面と受動的な面からのかかわりがあることが記されている。つまり「抱く」行為を受け止める側も同じ作用の「抱く」行為を受けていることで、例えば母が子を抱く姿は、裏を返せば子が母を抱く行為ということである。このように考えると保育者がかかわる「抱く」行為も同様に“保育者が抱く”“子どもが抱く”の行為が双方向的な意味をもっており「抱く」の姿には、“抱く”“抱かれる”という行為が一方向的な意味だけではないことに気付かされる。

「抱く」の行為には必ず相手がいる。キャサリン・キーティングの著書『HUG』の中で現わす、多くの「抱く」行為の形に見られるように一対一や複数の場合があり、様々な相手との組み合わせが見られる。乳児期においても最も身

近にいる母親（養育者）の存在は大きい。

母と子の関係を論じたボウルビィ（Bowlby. J）は愛着（アタッチメント）について—ある人間（子ども）と他の特定の人間（母親 或は養育者）との間に形成される愛情を伴った特別な心の結び付き、愛情のきずなである—こうした母と子が愛着行為を形成することは、この時期において最も心の安全基地を築くことになる。

感覚機能に比べると運動機能が未熟な状態で出生した人間の乳児をポルトマン（Portmann. A）がその状態について—生理的早産—と呼ぶように、この時期生活習慣の自立がまだできていない。乳児は母親（養育者）の手を借りて人間として生きていくための基本的（食事・排泄・睡眠など）欲求を獲得している。生きる手段を得るために愛着行為を築き、コミュニケーションを図る、そのかかわりの一つとして「抱く」行為があるのではないか。

抱っここの大切さとして—抱かれることでまず安心する。また抱き上げられることで視界が広がり楽しみが増していく—（高橋1995）

このように乳児の「抱く」は身体的未熟性を補うということ。心の充実・安定をはかり人間に対する信頼感を育てること。母親（養育者）とのアタッチメント形成により知的発達を促すとても重要な意味をもっている。このような乳児期の「抱く」行為は身体的自立が可能となり精神的にも自我や感情の発達が見られるようになる幼児期に向い徐々にその意味も変わってくる。

2. 観察を通しての「抱く」行為の実際の姿

(1) 2,3歳児の記録と考察

2,3歳児の子どもの特徴には、自己意識がたかまり始め言葉の発達も顕著である。自分（子ども）の思いをそのままストレートにぶつけてかかわろうとする姿も多く、この時期の子どもの姿から、すでに「抱く」行為に対して“抱かれない”“抱かれたくない”と自分の意思をはっきり示し“自分を抱いて欲しい”と要求したい

時にしか、抱かれてこない姿勢が見られた。これらのことを踏まえて、2,3歳児に見られた「抱く」の姿を次のように分類する。

子どもの「抱く」行為のきっかけについて整理してみると、その方向として、まず、子どもの心の動き（心理的作用）子どもの身体からの動き（生理的作用）子どもの環境からの動き（物理的作用）の三つの方向性が考えられる。その状態には、子どもにとっての快の気持ちと不快の気持ちが見られ、それが自分（子ども）の外から起きてきたものと自分（子ども）の内から起こったものとに分けられる。そのきっかけが様々な形を変え、一つには「抱く」その姿へと表出される結果となっている。きっかけの分類を下記の〔図1〕に示す。

また、そのきっかけによって起こる「抱く」行為の径路（方向性）について、右記の〔表1〕に示す。子ども（C）・保育者（T）の行動（→）・言葉（-→）をそれぞれ矢印で現わした。尚、以下の図・表に基づき保育事例を整理し、その中でも特徴的な姿が見られた事例を取り上げ下記に記す。また、事例の下に抱く行為の方向性と参加観察から読み取った保育者の気持ちを記述した。

〔表1〕

1	C ← T	Tが抱く
2	C → T	Cが抱きつく
3	C ⇄ T	Tが言って Cが抱きつく
4	C ⇄ T	Cが言って Tが抱く
5	C ⇄ T	Tが言って抱く
6	C ⇄ T	Cが言って抱きつく
7	C →← T	お互い抱き合う
8	C ⇄⇄ T	お互いの会話が成り立ち抱き合う

① →→→
←←←②

〈下記の記号・下線〉

T-担任（尚2,3歳児の事例のみ：T-自分・T2, T3-他の保育者）、M-母親、【S】-実習生

その他のアルファベット-園児（■男・■夫=男児、■子=女児）

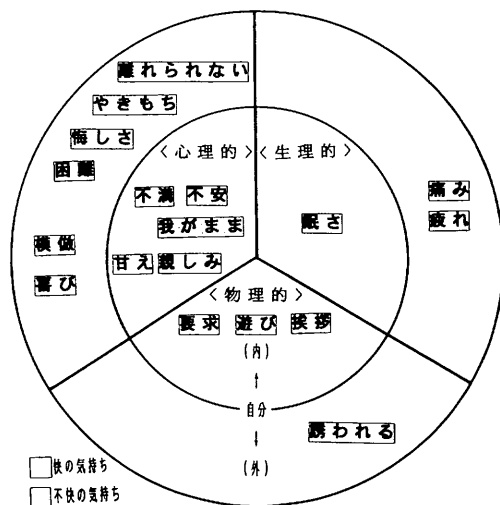
生理的 心理的 心理的⇄物理的 物理的

〔2,3歳児 参加観察《事例》〕

平成9年6月26日（木）晴れ

H夫・E子・C男：2歳児

あくびをしながらH夫が絵を描いていた。しだいに、うとうとしてきて、描き終わるころには、目が半分閉じかけていた。^①T2が抱き寄せるとそのまま、ぐっすりいびきをかいて寝てしまった。その姿をE子は見つめていた。H夫が母の迎えて帰った後、T2が今までの様子から「抱っこしてもらいたい人」と子どもに声をかけた。何人かがT2の前に来た。その中にE子の姿もあった。^②E子はT2に抱かれると、自分も寝ていいのかと思い、目をつぶってしばらく抱かれていた。C男は「C男も、抱っこして欲しい…」といていたが、いざT2が「抱っこしてもらいたい人」というと、なかなか自分からは抱っこ



〔図1〕

してもらいに行かぬにためらっていた。T2が「C男くんは…」と声をかけると、一目散に走って行き、ガバッと抱きついた。しかし、ほんの少し抱かれてただけで、また直ぐに砂遊びを始めてた。

(1) C ← T2 眠さ

具合が悪かったわけではないが、こうした集団生活にまだ慣れてないH夫の様子を見て、T2はH夫が安心して横になれる環境を作った。

(2) C \rightleftharpoons T2 模倣

T2は、見つめていたE子に気付いており、誰でも同様に受け止めてもらえることを、T2の言葉がけによって気付かせた。

(3) C \rightleftharpoons T2 模倣から遊び

真似したい気持ちから始まったC男の意識を大切に、T2はC男の気持ちを十分受け止め満足させ、次の遊ぶ気持ちを促した。

※上記の事例は提出論文における事例2に相当する。

2,3歳児の事例に見られる「抱く」行為の特徴として、生理的・心理的・物理的な作用の中にバラつきはあるが、全てに当てはまり、子ども自身の内面からのきっかけと外から起きたきっかけのもの、双方から読み取れる。この時期の「抱く」行為のきっかけがどれかに集中するのではなく、心理的なきっかけから始まり物理的きっかけへと展開することもあれば、生理的な未熟さからのきっかけがまだ見られる場面もある。また、模倣や遊びから「抱く」行為のきっかけとなって[表1]2.3.6.の径路を示すことが事例からは多く見られた。

(2) 5,6歳児の記録と考察

幼児後期5,6歳児は、乳児期の身体的・生理的に未熟な側面も育ち全体的に安定した時期に入る。自ら獲得していく力(自立心)が備わり、集団においても一つの節目の時期にさしかかる。保育園や幼稚園の中で、一番大きな学年として、子どもの意識が生まれ、年上のお兄さんお姉さんになった感情と行動が随所に見られる。

年長児を観察した中で「抱く」行為をする姿を頻繁に見ることはなく、実際観察できた姿は

わずかであり、確かに減っている。但、その行為が決してない訳ではなく、限られた相手(担任)と頻繁には見られなくなった限られた行為になっているのではない。

実際「抱く」行為の子どもの姿はさまざまである。例えば年少時に「抱く」行為が見られた子が年長になると全くそのようなこともなくなったり、年少・年中では逆に見られなかった子が急に求めてきたりしてくる。また、3年或は2年間いつも何となく担任の周りにかかわってくる子や全くかかわりをもたない子など、まだまだ、いろいろな姿を見せる子がいる。

そこで今回観察した年長児の姿、例えば年長児になると少しずつ「抱く」の形が、今までの前向きで受け入れていた行為から部分的に身体に触れる行為へと変わっていくなどの、変化の要因を考えると以下の5つを上げることができる。年長児と保育者が「抱く」行為までには至らなかった、その背景にこの5つの要因がそれぞれに何らかの影響を示していたのではないかと考える。

①果立ち

年長になるまでに「抱く」行為を経験したことによって、自ら次の行動に移したり、試したりすることができ、自分で「抱く」行為から離れていく力を持つ。

②友達関係の広がり

自分一人ではなく、他児の多くの援助を受けて安定し、気持ちを切り替え遊びを展開する。友達によって解消されていく。

③抑制力の調整

自分の中で我慢すること、発散することなど、欲求や感情を調節することが上手になっていく。

④担任への意識の変化

全面的な依存から、自分がいちばん困ったときに頼りにするなど、限られた依存への変化。恥ずかしさの芽生え。担任の影響力(例えば、一緒にする活動を楽しみ、遊ぶことなど)

⑤親・周りの大人への意識の変化

親の言っていることに賛同し、見習う。周りの大人からの助言を意識する。親・周りの大人の影響（例えば、大人から誉めてもらえることなど）

こうした要因が組み合わさって、年長児に見られる「抱く」行為が少なかったと考えられる。また「抱く」の形とは違う別の身体的なかかわりの姿が見られていたので下記に記す。

手をつなぐ	肩に手をかける
膝の上に頭をのせる	ぶつ
腰にまとわりつく	隣に座りもたれる
おぶさる	髪の毛に触れる
顔に触れる	手を握ってジャンプする
腕を組む	握手をする

キャサリン・キーティングが表現する「抱く」の形のように上記の行為は「抱く」に比べ、わりと頻繁に見られた。年長にとっては「抱く」行為と同じ意味をもつものと考えられる。以下にその行為が見られた具体的な事例のうち特徴的な三つの事例をここで記す。尚、2,3歳児の事例から見られた[図1・表1]と照らし合わせ、事例の下に「抱く」行為の方向性を示した。但し、保育者の気持ちについては今回の場合記述していない。その他に事例の背景として観察の範囲内で対象の子どもの普段の保育の様子や保育者とのかかわりなどを補足した。

5,6歳児 ビデオ観察 《事例》

1) 平成10年11月11日(水)曇り : R男
 昨日、園外保育に出かけて沢山の秋の自然に触れてきた子ども達、Tは貸し出しの本の中から昨日見た木についてわかりやすそうな『木の本』という題目の本を手にして、数人の子がTの周りに集まって「昨日見たのこれ?」「そう○○○というのね」「これも見たよ」その時R男も側に来た。片方の手には数冊の本を持ち、もう片方の手はTの肩に載せ体を添わせていた。

Tに話しかけると別のところに行ってしまった。

C → T 親しみ 《寄りかかる》

R男: Tの郷里が自分の田舎に近いことを夏休み明けに聞いてから、Tとの親近感を持ち、Tの側に来ることが増えた。

2) 平成10年11月11日(水)曇り : K子
 帰りの準備を始めていた時、帰りの支度をする前にA子はTに何か尋ねていた。TはA子のいつていることに答えていると、そこへ支度を終えたK子がTの座る隣の席を目指して走ってやってきた。TとA子が話しをしていることに気付いたK子はTの側で二人の様子を伺いながら見つめていた。A子との話しは、まだ続いていたがK子は話しの最中にTの腕にしがみつき、腰に手をまわした。するとTが「Kちゃんラッコさんみたいね」と声をかけTもK子の背中に手をまわした。K子はべったりとしがみついていた。TがK子を抱いている間も、TとA子は話しをしていた。しばらく続いていたが、話しが終わるとA子は支度をしに自分のロッカーの方へ行った。すると、K子もTから離れ椅子に座っていた。Tが「さぁ、お帰りしましょう」と声をかけるとK子はすっと立ち、Tの隣で皆がそろろうのを待っていた。

C → ←T やきもち

K子: 男女を問わず指示を出したり自分が常に中心にいる。
 Tとは素直に近付き体にふれたり、皆の前でも平気で膝の上になる。

3) 平成10年11月18日(水)晴れ : M子
 白組のM子は出迎えているTの合間を見て話しかけようとするが、Tが別のMと話しをしているので、Tの手に触れ振り向かせようとしている。TもM子のことに気付くがMからの話しに応対しているので、なかなかM子の方に振り向けずにいた。すると、TはM子の手をしっかりと握り返し『次は、あなたの話しを聞くからね』と合図を送っているように手を握っていた。

C ↔ T 要求

M子：年中から入園し、よくTと手をつないで過ごしていた。
その頃Tとのかかわりが多かった。

※事例1,2,3,は提出論文における事例9,10,22に相当する

事例から見られる5,6歳児の「抱く」行為を前述したような「抱く」以外の身体的なかわりも含めて見ていくと、2,3歳児と同様に生理的・心理的・物理的なきっかけが見られたが、同時に[表1]で示した8つの分類以外に「抱く」行為の径路も見られた。[C \leftrightarrow T]
[C \rightarrow ←T]どちらもきっかけとしてCの方からの言葉が聞かれないことや、Tとの会話が少ないことなどが特徴的である。また、行為のきっかけが物理的な作用として“ただ寄りかかっている・支えられている・触れている”といった姿が目立ち、心理的な『親しみ』がきっかけとなっていることが推測される。

この観察において年長児の「抱く」行為が少なかったことは前述の①～⑤の要因が影響していることではないだろうか。また、この時期の「抱く」行為の変化には行為が頻繁に見られなかったことや相手が限られてくることなどが確かに理解できる。

以上のことから考えると「抱く」行為の姿は外へ向けられた一つの力の現われである。こうしたかわりができる子であれば良いのだが、逆にその力が内にしか向けられない子や全く力の行方がわからない子などの姿が、5つの要因によって隠れて見えなくさせているように思われる。そのことの不安は残るがこの時期の「抱く」行為の意味を改めて考えさせられる結果となる。

3. 面接調査を通しての「抱く」行為に対する保育者の意識

(1) 保育者の「抱く」行為の意識

面接調査した16名の保育者の「抱く」行為の意識を基に検討していく。

年長ともなると、この時期（11月,12月頃）行為として「抱く」行為の姿は減ってきている。

時々見られるが正面きっての抱きつくのではなく、触れ合う行為になってきた。

子どもの「抱く」の姿の中で、半数以上の保育者が現状を次のように表現している。

- * 社会の影響を受けてか、世の中がとても忙しく家庭の中が変わってきている。母親は目に見えるところに目が向き、子どもには、形として見えることをさせてあげたいと考える。そうした思いの強い親が子どもを就園前の集団に入れることで早め早めの自立を促し、早く大人になってほしいと望んでいる。子どもは、自分から望んではいない状況の中で何らかのストレスを感じ生きている。大人顔負けの行動をしながら、その中でうまく自分を表現させ、どこか固く、表面的にはいい子を演じ、その場をつくらっている。
- * 『昔よりも今のほうが、抱かれる子が多い』と答えている保育者が多く見られた。その中で、ある保育者の場合『今も昔も、いろいろな家庭の状況の子がいる。決して以前に比べて多くなったとは思わない』との意見も聞かれた。今まで満たされていない、親がマイナス行為と呼ぶ“甘え”“抱っこ”などの姿を保育者に向けていると思われる。保育者もその代行的な役割をひしひしと感じている。
- * 子どものかわりの変化として感じられることがある。年齢が低いほど、肌と肌のぬくもりや母親的要素をストレートに必要な関係があり、それが成長と共に自立心や人間関係でのさまざまな要因がからんで「抱く」行為だけの受け止めでなく、受け止めてもらいたい部分が複雑になっていく、そして、しだいに自ら離れていく力が生まれてくる。しかし、年齢にかかわらず抱かれに来る子、抱かれることを嫌がる子、抱かれていない子など、こうした子どもの姿が目立っている。体をそったりつぱったり、肩も、腕も、足もコチコチに固くしてしまい、まるで四角い箱を抱いているような感触を味わったり、保育者とのぶつかり合いから尋常でないような抱っこが

続き、一体どうしたのかと悩むことも少なくない。

多くの保育者から年齢と共に「抱く」行為の姿は減っていることを聞かすが、実のところ子どもの本来の居心地の良い場所が一体どこにあるのか気になるところである。保育者は子どもの成長によって見えなくなる子どものサインを終始見逃さないようかかわっていることが面接調査の中から伺えた。

「抱く」行為の形の違う別の身体的なかかわりの姿が保育者との面接調査からも伺われた。前向きで抱くかかわりのほかに、例えば背中への・手を握る・体に触れるといった直接的なかかわりや言葉や視線など間接的なかかわりも「抱く」行為と同様な意味合いをもっていること保育者は意識していることがわかった。

そこで質問内容の中に「抱く」行為の意識を5つに区分し、保育者がもっている意識を知ることにした。下記の【保育者への質問内容】を基にし、以下にまとめる。

「保育における抱く行為」について 【保育者への質問内容】

平成10年 月 日 () 時間 : ~ :

1. 園名 教諭名 経験年数
 年長担任歴
 その他 園児数(年長 年中 年少) 職員数()
 園の方針・特徴

2. 保育者自身の意識の選択(①～⑤その他)

①見通しをもった抱く行為。

例えば、子どもの家庭・幼稚園・その他の身近な人間関係が影響して、反抗的な行為を示したり、甘えたりコミュニケーションがとりにくいなど、心の成長が育ちきれていない子どもを、保育者が年齢や容姿で区切るのではなく、抱く行為を通してその不足性を少しでも満たす方向へ導く行為。

②一時的なおふざけや遊びの糸口をもった行為。

例えば、保育者との関係(信頼関係を築く・コミュニケーションをとりやすくするなど)を深め、また保育者を通して他の園児との関係を広げるきっかけとなる行為。

③意識をもち(あまり考えていない)後で結果が付いてくる抱く行為。

例えば、子どもとのかかわりの中で、子どもを抱くことを好意的に思っているが、意識をもった意図的なかかわりや何か保育者に考えがあつたのかかわりとは、考えず接していたことが振り返って見た時(その時・その日・その後しばらくして・卒園後何年か経って)何らかの結果として子どもに影響した行為。

④本能のまま、ただ受け入れた抱く行為。

例えば、今、抱くことが必要か、必要でないかは、あまり重要でなく、目の前にいる子どもの姿そのままを丸ごと受け入れる行為。

⑤「抱く」行為へのこだわりをもち、そのかかわり以外の方法を考える。

例えば、抱く行為はしない。年齢によっては抱く行為は避ける。○○○の時は抱くけれど、□□□の時は抱く行為はしないなど、特別な意識を持っていることで、その行為以外で子どもとのかかわり、子どもの側にひそむ問題の受け止める方法を考えて接する。

3. 具体例を上げて次の質問を聞く。

あ)向き合う前の子どものと保育者の関係について。[個人・クラス(卒園児・在園児)]

い)「抱く」行為をしたことによって感じられた、子どもと保育者自身の反応について。

う)「抱く」行為後の子どもと保育者自身の変化について。

え)「抱く」行為後の子どもと保育者との関係について。

4. 「抱く」行為の意識について。

ア)意識①～⑤以外「抱く」の意識を考えてみたことはないか。

イ)抱くということの意識をもっているか、もっていないか。

ウ)保育者が「保育における抱く行為」の問いに、どのような気付きを感じられたか。

エ)その他。

5. 年長児の「抱く」の姿について。

a)今現在の年長児の「抱く」行為の姿を尋ねる。

b)以前担任された年長児に比べ、最近の年長児の「抱く」行為について、どうい姿が見られるのか聞く。

c)年長児になると、変化する「抱く」行為の姿を尋ねる。

d)その他。

①見通しをもった抱く行為。

何か問題があつて意図して向き合うことが多い。その場合、保育者の直接的な意図した行為と子どもの様々なアプローチがきっかけとなった間接的な意図した行為があり、こうし

た2つの方向から見通しをもつ意識が生まれる。

②一時的なおふさげや遊びの糸口をもった抱く行為。

保育者と子どもの両方からのアプローチがある。その時々によって保育者からであったり(T→C)子どもからであったり(C→T)始まりはどちらかの働きかけによる行為である。但、年長児の成長と共にこうした矢印がストレートにならず、複雑になっていく。[T-保育者 C-子ども]

③意識をもたず(あまり考えていない)後で結果が付いてくる抱く行為。

実際の保育の中では、瞬時に考え即実行する場面が多く見られる。このことは「抱く」行為だけに限らず、保育全体から考えられるが、こうしたかかわりは保育者が無意識にしていることではないかと思われる。つまり保育者自身の自然な姿である。この自然の基盤には、保育者の保育観や経験・性格・立場などいろいろあり、保育者の意識の中で自ずとためらわず無意図的なかかわりをしているのだと考える。

④本能のまま、ただ受け入れた抱く行為。

保育者は意図しない自然にかかわる行為が見られる。その中にここで示す“本能のまま”という行為は保育者間でとても気になる行為の一つである。その丸ごと受け止める行為が保育者の一方的なかかわり、独占した姿にとられ易い。そのストレートの行為が子どもにとって逆効果を生むことがしばしば見られる。

⑤「抱く」行為へのこだわりをもち、そのかかわり以外の方法を考える。

こだわる意識は決して「抱く」行為の是非を問うのではない。但、ここで数人だが「抱く」行為に対してこだわりをもち、常に探求している保育者の存在があったことを知る。しかし今現在年長児がかかえている問題が多過ぎて、この「抱く」行為以外に保育者がその子とかかわる別の行為を考えることがなかなか

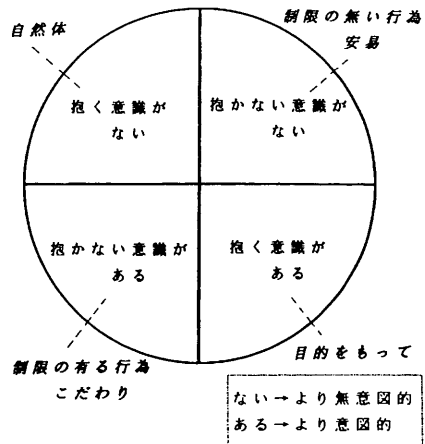
難しい。

このように①～⑤に区分した保育者の意識もあるが、実際、保育者の「抱く」行為の意識としては、抱いたり、抱かなかったりすることが当然ある。理屈に合わない行為や分類しすぎて見えなくなる行為も確かにでてくるのがわかる。そこで、その意識の前提にある保育者の「抱く」行為の意識を考えていくことにした。

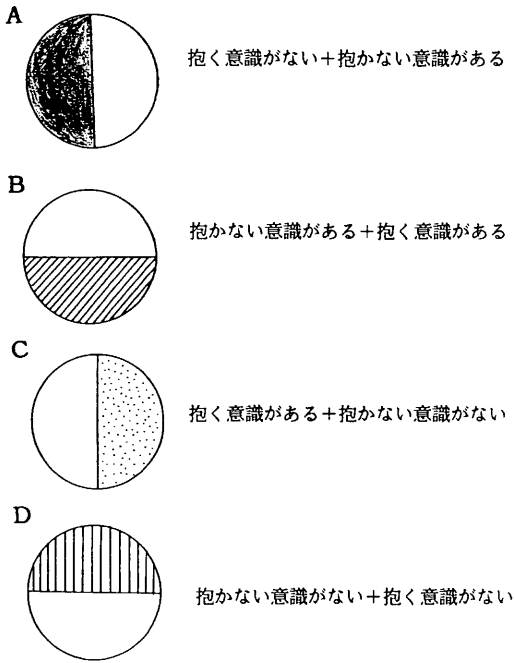
(2) 保育者の「抱く」行為の考察

保育者の「抱く」行為の意識の部分には「抱く」という一つの意識の中に重なり合っている双方の意識があるのではないかと考える。

[図2]に示すように4つの元の意識が組み合わせあって[図3]A, B, C, D の実際の行為のパターンを作っているのではないかと考える。下記に[図2・3]を記す。



[図2]



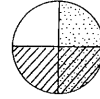
[図 3]

よって保育者もつ「抱く」行為の意識が、常にその子・その子、その場・その場に合わせ、多種多様な答えが出てくるのもこうした意識の二重構造があると考える。

そこで[図 3]意識のパターンを基に5つに区分した前述の保育者の意識と照らし合わせ、当てはめてみることにする。以下、【保育者への質問内容】問3. あ)～え)に添って保育者の意識や事例を記述し、そこから保育者の意識を分類する。尚、ここでは特徴的な四つの事例を取り上げ、保育者の意識の部分を下線で現わし下記に記す。

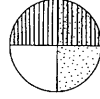
①見通しをもった抱く行為。

[B・C]



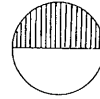
②一時的なおふざけや遊びの糸口をもった行為。

[C・D]



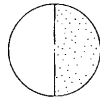
③意識をもたず(あまり考えていない)後で結果が付いてくる抱く行為。

[D]



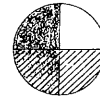
④本能のまま、ただ受け入れた抱く行為。

[C]



⑤「抱く」行為へのこだわりをもち、そのかわり以外の方法を考える。

[A・B]



(右記の記号)

T-担任, M-母親

その他のアルファベット-園児 (■男=男児・■女=女児)

保育者の「抱く」行為における意識《事例》

1) Tのクラスの中でF子のフォローに回ることが多い、そこでG子の存在に気付く。改めて自分の立場がF子を含め、そのクラスの両方のフォローをしていく役割があることを認識する。それまでF子に対して嫌がらせ行為が続いていたがその頃からTに対しG子の「抱く」行為が始まった。Tの方は抵抗があった。しだいにこの甘えは尋常ではないと思いつけ止められる時は遊びの中でかかわっていくことにした。G子はTに“何だかわからないけど、こういう出し方を示す” Tの受け止

めによって“こんな出し方でも、時にはいいのだ”とG子自身少しずつ気持ちをコントロールしていき、素直にものが見られるようになっていったのではないだろうか。その後TはG子を含めクラスの中で同様なかわりをもつ子が求めるようになり、Tも受け止める機会をもつことがその時期（一学期）多く見られた。

①見通しをもった抱く行為の〔B〕に当たる。

2) 習い事をしている子の中でL子は最近急に「一緒に遊ぼう」「抱っこして」といい出す。Tはいつもいってこない子が来る時はとりあえず抱っこして、その後考えることにしている。しばらくすると「L子の発表会がある」と連絡を受ける。Tは以前のL子の行動を振り返り、その前後の変化に気付きそのことが影響しているのではないかとMに尋ねたが「関係はない」と答えが返ってきた。

①見通しをもった抱く行為の〔C〕に当たる。

3) TはI子を持ち上がりで2年間受け持っていた。I子のMは自立を早めることばかり、その中にいたI子は他児に対し、采配を振るい、陰湿な行為も多く見られていた。TがI子も含め全体に「皆、可愛いから先生の子どもにしちゃおうかな」というと「私みたいな悪い子でもいいの?」と返ってきた。その後、誰もいない時に声をかけるとしっかり膝に抱かれに来る。こういう気持ちは誰かが助けてあげないと思い見通しをもって抱いた。Tはこうしたことが必要な子どもが年長にもいることを実感した。

①見通しをもった抱く行為の〔C〕に当たる。

4) H子は事情があって施設から登園している。H子は園でのほけ口を全てTに向けていた。Tはその全てを丸ごとどんなことがあっても受け止めようと思った。H子は抱かれることで自分を落ち着かせていくこの行為が一つの

方法になっていた。T自身の数えきれないほどの怒りの感情がしだいにとおしいと思えるまでに至る。わずかだが信頼関係が生まれた。

①見通しをもった抱く行為の〔C〕に当たる。

※事例1, 2, 3, 4, は提出論文における事例1, 3, 8, 13, に担当する。以上保育者の「抱く」行為における意識について紙面の関係上、20項目当てはめた全ての事例についてここで述べることはできない。そこでその他の事例についてはその範囲のみ記すことにする。尚、保育者の意識の詳細については提出論文を御参照下さい。

①見通しをもった抱く行為の場合

〔B〕は事例1, 以外に1件あった。

〔C〕は事例2, 3, 4, 以外に3件あった。

②一時的なおふざげや遊びの糸口をもった行為の場合

〔C〕は該当がなかった。

〔D〕は1件あった。

③意識をもたず（あまり考えていない）後で結果が付いてくる抱く行為の場合

〔D〕は2件あった。

④本能のまま、ただ受け入れた抱く行為の場合

〔C〕は3件あった。

⑤「抱く」行為へのこだわりをもち、そのかわり以外の方法を考える場合

〔A〕は1件あった。

〔B〕は1件あった。

質問の中【問4-イ】の保育者の「抱く」行為の意識の有無の問いが、ほぼ半々であった。こうして20通りの保育者の意識が含まれる事例から元の意識をたどると、年長児を「抱く」意識には『見通しをもった抱く行為』〔C〕（抱く意識がある+抱かない意識がない）が傾向として多かった。

4. 2, 3歳児から年長児へ移行する「抱く」行為

保育者が2, 3歳児を集団保育において「抱く」という行為の意味について、前述に記した事例

を基に20カ所の場面から子どもの「抱く」行為の姿を見ると、この時期の子どもは、生理的、心理的、そして物理的にも今だ未熟でアンバランスな姿が残るが、実は自立心が旺盛で何事も自分(子ども)の力を外(他)に向ける行為が目立っている。事例からも一つ一つの表現行動が子どもから保育者へ向ける行為であるのと同時に、集団保育の中で自分(子ども)の力を試しているように見える。

そこで集団保育の中の「抱く」行為の姿において子どもが向けたものと保育者が受け止めたものを現わすと以下の三つの意味を含んでいると考える。

- 1-気持ち(感情)
- 2-環境(居場所)
- 3-きっかけ(離れる力)

「抱く」ことを通し保育者が成し得ていることは、子どもの気持ちを共感し、安定できる場となり、更にこの時期だからこそ、何事も自分自身でやろうとする力や挑戦するその行為を生む「抱く」である。その集団の中で最も身近にいる保育者が「抱く」行為を通して、きっかけとなる役割を意味していると考えられる。

次に、保育者が年長児(5,6歳)を集団保育において「抱く」という行為の意味についての事例を基に見ていくと、実際の「抱く」行為では抱きしめる姿とは違う、頻繁に見られない限られた場面や、担任との一対一の行為へと移行していく。部分的に触れ合う行為が多くなり、それが「抱く」と同じような意味を持った行為になることが特徴的である。こうした関係が見られた5,6歳児の「抱く」行為を、前述の-1~-3-にまとめた2,3歳児の「抱く」行為の意味と照らし合わせ、5,6歳児の「抱く」行為の意味について整理すると次のようになる。

[表2]

保育者の役割	2,3歳児の「抱く」行為	⇒	5,6歳児の「抱く」行為	保育者の役割
受けとめる	気持ち(感情)		応えを求める	応える
相手が特定とはいえない	環境(居場所)		相手が特定である	最終的に観られる存在
矛先をかえる	きっかけ(離れる力)		問題点に立ち回り解決していく	問題点を一緒に考える

[表2]のように、2,3歳児において、保育者が受け止めていると思われる、子どもの「抱く」行為はこの3つの-1-気持ち(感情)-2-環境(居場所)-3-きっかけ(離れる力)を柱として移行していく、5,6歳児の「抱く」行為にも同様な意味があり、-1~-3-の部分を支えていると考える。但し、年長児の「抱く」に対するそれぞれの意味に複雑さが加えられている。例えば、ただ受け止めてもらう行為から、そこから応えを求める行為へ。次に「抱く」行為の相手が集団の中で特定されていない相手を特定化していく。そして「抱く」のきっかけによって矛先を変えていた意識から、自分(子ども)が直面している問題を子ども自ら解決していこうとする意識へ、それぞれ移行していることが理解できる。保育者の役割も、2,3歳児と同様な面もあるが実際の前向きで抱くような行為だけでなく、その子のどの部分を抱く(支える)かが、より複雑さを増すことだと考える。

実際の観察の中での年長児の「抱く」行為はしだいに減っている。このことから考えることは、意識が複雑になることによって、子どもの問題が容易には受け止め切れなくなっていることがわかる。「抱く」に限らず保育者へ意思表示する子はより受容の行為は多いと思われるが、表現が乏しい子や自ら解決しているように見られる子など、保育者が意図的な意識をもって

ないと、子どものサインを見逃してしまうのではないだろうか。保育者はそれに応えていくことを繰り返していく、その行為もまた「抱く」行為と同じ意味を持ち、その三つの役割を担っていると考える。

V まとめ

『保育における抱く行為』について、子どもと保育者の双方の側から見てきた。実際の観察をした中での集団保育の「抱く」行為の姿は、限られた保育時間の中のほんの一場面にすぎない。その観察の範囲で見ると限り「抱く」行為を目にすることはなかなか出来ず少なく感じられた。

しかし、年長児になったからといって実際の行為がないということは決していえない。但、年齢によっては現わし方にも変化が出てくるのではないと思われる。子どもにとって、行為そのものは一つの外へ向けられた力であり、保育者（担任）に向けた、最も力のある意思表示の形である。年齢にかかわらず、その子の今の姿であることがわかる。

これまでの集団保育の中の「抱く」行為の姿から、気になる子どもの姿の特徴が見られた。年齢に限らず『抱かれない子』『尋常でない抱かれ方をする子』の存在である。但、頑なに拒否をしたり、抱かれても手・足をつっぱらせ、体を固くする、抱かれることに心地よさを感じられない子の姿や、また、一方で尋常でないほどの抱かれ方を望んでくる子どもなど、こうした子どもは単にスキップの不足を感じさせる「抱く」行為だけではないと考える。もちろん、この不安は「抱く」行為だけに限ったわけではない。子どもを取り巻くいろいろな状況がある中で、保育者はその幼稚園の場面しか触れていない。就園前の子どもの生活（環境）、その後の子どもの生活（環境）も含め、考えていかなければ子どもの実態は見えてこない。

確かに世の中の流れが変わってきている。そのことで親や保育者に大きな影響をもたらしていることも感じられる。親自身の価値観・家庭、

親子の関係・就園前の子どもの生活・その後の子どもの生活など、周りの全てを問題として捉えすぎて、子ども自身が、今、一体どうなっているのかということに、もう少し目を向け把握していかなければならないことに気付かされた。

保育をしている中から生まれた「抱く」行為への疑問は、自分以外の保育者が子どもを抱くその意識に“抱かなくては、不安を取り除けない”“かかわりが少なかったから抱っこする”など「抱く」行為を短絡的な解決法としているような、そうした意識を“無闇に”“安易に”という言葉で表現していた。この意識は保育者の存在や保育観に大きく左右されることを強く感じる。また集団保育を意識すると“平等”“不平等”観に対する思いも考えさせられるが、個々に向ける行為の違いを感じると、しだいに自分の中での受け止め方も変わってきた。しかし、不平等な行為が当然であるという意識は自分にはない。今、その子どもが必要としているか、それほど必要としていないか。そここのところを見極めていくことができれば、決してその行為は不平等ではない。子どもは保育者よりも早くそのことを見極めてしているに違いない。

こうして改めて自分の「抱く」行為について整理してみると、確かに自分の意識の前提には、抱かない意識があり、こだわりをもってしたこと、自分には「抱く」というその部分の意識がなかったこと、考えのなかったことをここで気付かされた。これからも抱いたり・抱かなかったりという行為はあるだろうが、今までの「抱く」行為に対する自分の意識の範囲を前よりは広げることができたのではないと思われる。

子どもの「抱く」行為については、まだまだいろいろな姿を目にする。ただ前向きに子どもを受け止める「抱く」行為だけではない、例えば手を握る・寄りかかるなど、形は違うが同じ意味合いをもつ子どもとのかかわりに応えていくことが沢山ある。今後もその「抱く」のかかわりを通して子どもの姿を見つめ、それを明らかにしていきたいと考える。「抱く」行為の是

非を問うことではなく、その子が今抱えているものに気付き、近付くこと。そのことを現場の保育の中で自分が考えていくことが重要であると思う。

今後の課題

1. 「抱く」行為における“抱かれる子”“抱かれない子”の子ども自身の背景・要因などに目を向け変化を追っていくこと。
2. 子どもの抱かれ方に着目し、その要因を探ること。
3. 家庭環境における「抱く」について考えていくこと。
4. 保育者の「保育観」に触れ、自己意識の見直しをすること。

謝 辞

本研究を進めるにあたり御指導頂きました川合貞子助教授に心から感謝致します。また、観察・面接調査などに御協力下さいました各幼稚園の先生方と園児の皆さんに厚く御礼申し上げます。最後に、私事の為に終始御迷惑をおかけしました諸先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。

引用文献

- 1) キャサリン・キーティング「HUG-2-」
- 2) 高橋恵子「自立への旅立ち」P107-109.
- 3) 梅棹忠夫(監修)他「日本語大辞典-第一版-」P1314. P1328.
- 4) 新村出(編著)「広辞苑-第四版-」P1525.

参考文献

- 1) 森上史朗(編著)「5歳児の世界」世界文化社 1986年

- 2) J・アラン他/鷺見春彦(訳)「抱っこで育つー心をときほぐす愛着技法」風媒社 1987年
- 3) 古澤頼雄(編著)「幼児心理学の展開」北樹出版 1988年
- 4) 渡辺久子「抱きしめてあげて」彩古書房 1988年
- 5) 三宅和夫「乳児のアタッチメント」日本医師会雑誌 第107巻 第9号 P1641.-1644.
- 6) キャサリン・キーティング「HUG-2-」扶桑社 1993年
- 7) マーサ・G・ウェルチ /石田遊子(訳)「抱っ子は育つ」学苑社 1992年
- 8) 二木武(訳)「ボウルビィ 母と子のアタッチメント 心の安全基地」医学薬出版株式会社 1993年
- 9) 高橋恵子「自立への旅立ち」岩波書店 1995年
- 10) 高橋道子「子どもの発達心理学」新曜社 1996年
- 11) J・ホームズ/黒田実朗 他(訳)「ボウルビィとアタッチメント理論」岩崎学術出版社 1996年
- 12) 井原成男「ぬいぐるみの心理学」日本小児医事出版社 1996年
- 13) J・ボウルビィ/黒田実朗 他(訳)「母子関係理論-新版I 愛着行動」岩崎学術出版社 1997年
- 14) 梅棹忠夫(監修)他「日本語大辞典-第一版-」講談社版 1997年
- 15) 新村出(編著)「広辞苑-第四版-」岩波書店 1997年
- 16) 若井邦夫 他「乳幼児心理学-人生最初期の発達を考える」サイエンス社 1997年